

たぐみ

Craftsmanship

特集 倉敷本染手織会作品展

第16号

東京職工学校と

東京工大

先日、大岡山の東京工業大学で、主として窯業、セラミックス分野の開校と教育に深くかかわったゴットフリート・ワグネルを記念した「近代日本陶芸・先端セラミックスの美・用・学の世界」という大イベントが行われた。

その初日、開会式の挨拶の中で、本学が当初「東京職工学校」として設立されたことが誇らしくのべられた。そして更にワグネルの建学の精神として、常に現場を大切にすること、失敗をおそれずに挑戦することなどが、同窓のノーベル賞受賞者の白川博士の例をひいて語られた。

日本最初の官立の技術者教育機関として、東京職工学校は一八八一年(明治十四年)に創設された。このあと一九〇一年に東京高等工業学校と名を変

えるが、そのころ蔵前に在ったことから蔵前の高等工業の名で知られた。

そういえば大正時代に窯業科で学んだ河井寛次郎、濱田庄司が、京都の陶磁器試験場時代に千種に余る釉薬の実験を重ねたという話も、ワグネルや板谷波山から承けついで技術者魂、職人根性のなせるわざであったとうなずけるのである。

図案科を出た芹沢銈介も、彼の一生の仕事をとおして対象の写生や材料の吟味、モチーフへの周到な調査など、実感と実証を大切にする人であった。

今回のイベントの特設ショップでのことだが、毎日熱心に来場して筆谷桂作の手付のマグを求めた学生に、「どこが気に入ったのですか」と係員がたずねたところ、「これを机の上において、毎日エネルギーをもらおうのです」と答えたという。いかにも実感のある技術者の卵らしい彼の言葉に、係員はすごく感動したという。(志賀直邦)

倉敷本染手織会作品展

会 期 平成十六年十二月十三日（土）～十八日（木）
十月十四日（日）は営業いたしません。

会 場 銀座たくみ 二階ギヤラリー

営業時間 十二時から十九時まで

日曜日・最終日は十七時半まで



倉敷本染手織研究所（外村吉之介旧邸）

倉敷本染手織会と倉敷本染手織研究所

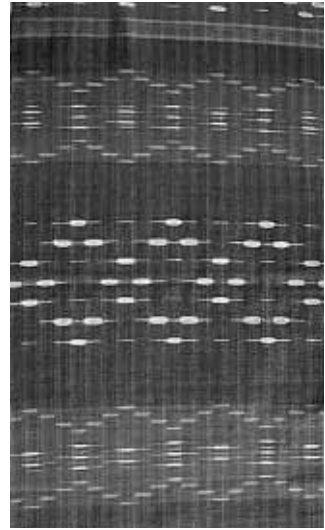
所長 石上信房

倉敷本染手織会はこの度たくみで三回目の展示会を開催して、会員の仕事を観ていただきます。この会は倉敷本染手織研究所で一年間の修業を終えた者の集まりで、卒業生は二百八十人余になりました。

倉敷本染手織研究所は父外村吉之介が一九五三年に始めた本染と手織の学校で、倉敷民藝館の前の川をはさんで真つ正面にあります。研究生は毎年六

人前後と少人数で、おそらく全国で一番規模の小さい学校でしょう。

太平洋戦争が終って八年後の世の中はまだ戦争の混乱が残っている時に、倉敷民藝館館長だった父は民藝運動の一環として、倉敷民藝館附属工藝研究所（後日今の名称に改め）を自宅に開設し、その仕事の一つとして自らの仕事の本染手織の伝修を始めました。遠方からの人には自宅の部屋を開放して



テーブルセンター（部分）



木綿さき織袋

起居を共にし、日常に民芸品を活かした全生活・全人格の教育が行なわれた。一九九三年、九五年の父母の逝去後は私が両親の志を受け継いで、起居こそ共にしてはいませんが、同じ処で、同じ人数で、同じ活動を続けています。おそらく全国で一番歴史のある一番充実した学校でしょう。

しの中で働く健康で無駄がなく、真面目で威張らない美しさを備えた品物を作る工人を養成するのが目的です。昔の無名の工人が美しい品物を無数に作って民衆の生活を支え潤したことは、私達民藝運動のたずさわる者を励まして止みません。伝統によって祖先の知恵を受け継ぎ、協力によって仲間



ウール椅子敷4種

の力を受ける仕事の美しさは、小さな個人の限界を超えた自由で大らかな境地の賜物です。これが近代教育の個性主義や芸術の自己主義といかに異なるかは自明です。己を表したいのではなく、美しい品物を作りたいのです。名前の「本染」とは天然染料で糸を染めることです。化学染料と違って落ちついた味わい深い色が得られます。「本然の染め」という強い誇りがこめられています。「手織」とは文字どおり手で布を織ることです。材料がよく活かされて、使い心地のよい布になります。研究所での活動は、実技の繰返しを旨としていて、机に座つての学習は柳宗悦先生の名著「工芸文化」の講読の時間だけです。繰返しなしに技の熟達はなく、技の熟達こそ美に通じる唯一の道だからです。

「工芸文化」で民藝美論を深く心に刻み、実技の繰返しで物を作る知恵と喜びと責任を腕の覚えた会員が、毎年秋に自ら織った品物を持ち寄って展示会を開催しています。飾ってもらうためでなく、日常の生活に使っていただくために。

出雲の鍛冶屋

高橋義一さんの仕事

むかし「村の鍛冶屋」という童謡があった。トンテンカンという音のリズムがメロデーによく合って、鍛冶屋をじつさいに見たことのない子でも、絵本で見た状景が目には浮んだ。



三本立の燭台

志賀直邦

ロシアにも年老いた鍛冶屋の相い槌を熊が打つ童話があつて広く親しまれたという。鍛冶屋の仕事は昔から、洋の東西を問わずそれほどに人びとの暮らしに身近で、必要不可欠のものであつた。



上下に伸縮する燭台

た。

とりわけ農業に用いる鍬くわや鋤ま、鎌、それに山仕事に欠かせない鉋なたや斧おのなどは世界中で例外なく古くから用いられた。刀剣や槍なども時代によつては生産の主力となつた。

明治になつてからも、日本では鍛冶の仕事は村では農林業とともに、町や都会では大工道具や包丁など大量に用いられたが、大産地による大量生産と



上から十能、灰ならし、火箸



菜切包丁(上)と小魚包丁
包丁の手入のコツは真っ平らな中砥、仕上げ砥で研ぐこと。使ったあと80度位の湯に通し布で必ず拭くこと。

問屋による流通によって、人びとの暮らしと直かに向き合った村の鍛冶屋の仕事は次第に姿を消していった。

しかし民藝運動とともに、今なお残る村や町の鍛冶の仕事はしばしば紹介されてきた。何よりも生産と生活に直結した造形の美しさが、諸道具の中でも比類のないものだったからである。

今回ご紹介する出雲の高橋義一さんの仕事もその代表的な一つである。高

橋さんが民藝協会の仲間に入り、日本民藝館の公募展にも製品を出品されるようになったのは、出雲出西窯の多々納弘光さんとの縁からだという。

だいぶ以前のことだが、知人の車で出雲の所原町、といつても人家も多くない辺りを通った折り、一軒の鍛冶屋さんを見つけ声をかけたのだという。

多々納さんは、この町はずれの鍛冶屋高橋義一さんの仕事振りと人柄に魅せ

られ、そのごしばしば訪れては試作も含めて製作を依頼したという。

高橋さんの主な仕事は、やはり農山村における道具、鍬や鎌、鉋などの製作と修理や包丁づくりである。いずれも入念で美しく使い勝手もよい。このほか高橋さんの仕事で広く愛用されているのは燭台（ローソク立）や火箸、灰ならし、自在などの吊金具である。

三本立の燭台は、もともと濱田庄司が若い頃イギリスから招来したものが原型と思う。また上下に伸縮する型は江戸時代からの代表的なもの、いずれも今では高橋さんのほか作る人はいない。包丁は家庭用で菜切包丁や出刃、小魚包丁、果物ナイフなど。

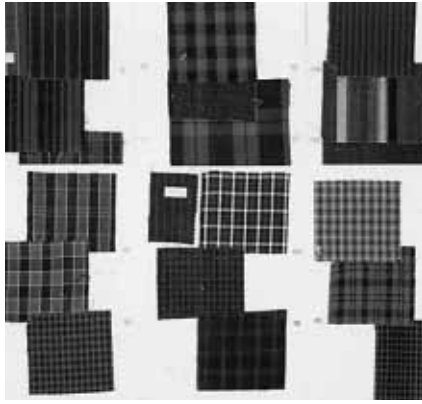
出雲地方は古代から砂鉄のタタラ吹き製法による玉鋼たまがねの産地であった。その出雲でわずかに残る野鍛冶高橋義一さん、そしてむかしは向う樋も打った奥様の揃いっしょってのご長命と、出雲野鍛冶の栄盛いっせきを祈るのである。

糸の話 布の話（上）

吉本 力

糸が太ければ、太いほど、織り上がった布は厚くなる。当然のことのようですが、さて。

糸の太さは、番手という数字で表わされます。ご家庭で使われるミシン糸は五〇番か六〇番、また、旅館に泊まったとき出される浴衣は、二〇番から



木綿布の見本帖

三〇番の糸で織ったものです。藍など天然染料で染めるには、「かせ」にした糸を、何度も染液に浸けて染めますが、その作業の間に、糸がお互いに絡み合っただけで、巻き取るのが一苦労となります。二〇番や三〇番のように細い糸では、

その巻き取り作業が、とても難しいものとなります。藍染木綿を織っているところでは、多くが、もう少し太めの糸、一六番や一〇番の糸で、無地や縞、格子、縞を織っています。ここでお分かりのように、糸は番手の数字が小さいほど太く、大きい数字になると細くなります。

細い糸を紡ぐには、繊維の長い綿でないと、紡ぐ過程で糸が切れてしまします。一般には、細い糸ほど、繊維の長い上質の綿を使っていること

になります。私の住んでいる大阪では、昔、河内木綿が盛んに栽培され、木綿地が織られました。しかし、繊維の短い綿であったため、布団地に使われることが多かったようです。一方、三河地方では、衣料に使われる上質の綿が産出したようです。もちろん、これは江戸時代から明治初めまでの話で、現代織られている木綿は、輸入された綿から糸が紡がれているので、地方の差はありません。

糸には、一本撚りの糸「単糸」のほかに、二本撚り合わせた「双糸」、三本撚りの「三子」などがあります。

三〇番単糸を二本撚り合わせた三〇番双糸は、一五番単糸と同じ太さとなり、藍染木綿でよく使われている一六番単糸とほぼ同じ太さといえます。ほぼ同じ太さの糸で織った布では、厚さの点ではあまり変わりはありませんが、双糸で織った布の方が、艶がありスベスベして肌触りがよく丈夫ですが、木綿らしいワイルドな雰囲気は、単糸の

布の方が一段上ということになります。手織りと機械織りとは、どう違うのでしょうか。

一般に、手織りで木綿を織る際には、多くの場合、タテ糸には双糸を使います。単糸をタテ糸に使う場合は、必ず糊付けをして固めておかないと切れてしまうので、手織りでも機械織りでも、糊付けせずには織れません。しかし、双糸ですと、糊付けなしで織れます。

機械織りの布は、タテ、ヨコ共糊付けをしてピンと張った糸で織るうえ、シャトルを強い力で送りますので、糸の張り方がきついため、洗濯をして糊を落とすと、タテが八〇九〇%、ヨコは四〇五〇%も縮みます。布の面積が小さくなるだけでなく、糊と共に毛羽も落ちて、重さも一割近く軽くなります。一方、手織りの場合、糊付けしないで織りますから、ヨコ糸が伸び切つてない状態で打ち込まれ、タツプリ入っているの、縮みません。

機械織りの布を、手織りの布に少しでも近づけるためには、織り上がった布を糊抜剤に浸けて糊を分解させ、よく洗って収縮させる必要があります。

一般に、売られている機械織りの木綿は、安いのが身上ですから、糊抜きや収縮をしたものではありません。

店で売っている布を、手でさわってみると、堅いので厚く感じます。買って帰って何度も洗って糊が落ちていくうちに、意外に薄く「なんだ、こんなにペラペラの布になってしまったではないか」と思うこともしばしばです。

二〇番手で織った布でも、糊を落とした一六番手の布より厚い感じがします。また、同じ番手で織った布であっても、糸の密度によって、布の厚みが違ってきます。これも、糊を落としてみないことには、正味のところはわかりません。

つづく
(さくらさや主宰／大阪市)

特別企画

民藝運動の作家と

職人の仕事展

会期 十二月四日(土)～十一日(土)

十二月五日(日)は営業致します。

会場 たくみ二階サロン

民藝運動の数十年の歴史の中で、各地の職人や作家によって作られ、人びとに親しまれてきた手仕事の品々が、今また、新しい使い手を求めています。

日本や外国の伝統ある手仕事のすばらしさを、存分にお楽しみ下さい。

出品品目

陶磁器 濱田庄司、河井武一、皆川マス、会津本郷、益子、瀬戸、丹波、牛の戸、袖師、小鹿田、苗代川ほか各民窯

海外民藝 メキシコ、ペルー、スペイン、ギリシャ、イランなどの陶器やガラス器

その他 染織品や雑貨
書籍 工藝関係の書物、図録など



左上から目鏡入、小物入、名刺入、朱肉池、胴乱

たくみ歳時記 菅原さんの樺細工

柳宗悦は樺細工の特質について、桜皮がもつ美しい色彩と光沢、そして強靱さの三つをあげています。しかしその美しさと強さを出すのにはたいへんな手間と努力が要るのです。

まず桜皮の不均等な上皮を取り去るための刃物でこく仕事にはじまり、成型、膠での接着、熱した鍍(こて)での加熱仕上げ、そして刃物や鮫皮、砥草での磨きと書けば簡単ですが熟練の仕事です。

菅原政光さんはこの樺細工に三十六歳の時出合い惚れこんで、角館の小柳金太郎に師事、そのご平成六年に岩手県大槌町に工房をもって樺細工づくりに励んでいます。

菅原さんの仕事の特徴は、多くの人たちに日常に愛用してもらいたいというのと、限られた材料を大事にしたという思いで、主に座右の小品が多いということでしょうか。

人気の品は大小の葉入、めがね入や小箱、煙草入や胴乱、小型の茶筒などさまざまです。価格も二千円台から一万円台、二万円前後とお手頃です。

因みに菅原さんは平成十六年度の倉敷民藝館賞を受賞され、十一月二日から七日まで倉敷民藝館で展示会を開かれました。

あとがき

倉敷本染手織会と研究所の創設者であった外村吉之介先生が、終生の題目として教え子たちに諭された言葉がある。それは「木綿往生」と「無地極上」の二つである。

実生活の中で己れを誇ることなく、木綿のようにみなへの役に立つ人間になつてほしい、そして最後は雑巾(ぞうきん)として仕え、役割を終える。そしてまた「無地極上」については、陶磁器や衣服において日常に使い勝手のよいものほど無地の品が一番である。

至言であると思う。虚飾にあふれ、実質の価値よりも見せかけの付加価値を追う世情の行きつく先は明らかであろう。外村先生に学ぶことはなお多い。

(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八十四一二
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇―二―三五六五九
定価 六〇円(税込)